

協働シンポジウム

「八剣山周辺地域の地元資源とその活用」

講演要旨

平成 22 年 4 月 3 日

さとやま八剣山事務局

八剣山周辺地域活性化プロジェクト事務局

はじめに

この資料は、平成 22 年 4 月 3 日に開催された協働シンポジウム「八剣山周辺地域の地元資源とその活用」の講演内容を、当日の録音データをもとに取りまとめたものです。このシンポジウムは、八剣山周辺地域の活性化を目指す関係者の働きかけで実現したもので、当日は、さまざまな立場の講師の皆さんから示唆に富む有意義なお話をいただくとともに、「八剣山周辺地域活性化プロジェクト」の発足宣言があり、この一環として「八剣山フルーツ産業創出事業推進計画」が提案されました。その後の動きをみると、このシンポジウムによって八剣山地域活性化の方向が明確になり、まさに再点火の契機となった感があります。また、ご参加いただいた多くの市民・関係者の皆様のご支援もいっそう厚みをましてきております。この資料が、今後この地域で展開されるであろうさまざまな具体的展開の拠りどころとなり、引き継がれていくことを、このシンポジウムの主催者の一人として心から願うものです。

なお本資料取りまとめに当たって、聞き取りにくい録音データからの文書化に、さとやま八剣山会員・貝塚忠弘様に多大のご尽力をたまわりました。ここに記して感謝申し上げます。

以上

平成 23 年 1 月 5 日

さとやま八剣山事務局

八剣山周辺地域活性化プロジェクト事務局

協働シンポジウム「八剣山周辺地域の地元資源とその活用」

八剣山周辺地域は優れた景観や自然環境に恵まれ、多くの潜在ジオサイトやアウトドアスポットが存在しますが、その利用は十分に行われているとはいえません。また、古くからの果樹栽培地として知られてきましたが、営農者の高齢化とともに遊休農地が拡大するなど、地域の活力が失われ荒廃化が進もうとしています。本シンポジウムでは、八剣山周辺地域に関わる地元住民や地域支援グループ、企業、関係行政者などが主体となり、これまでの活動紹介をとおして八剣山周辺地域の潜在地元力を再確認するとともに、関係者が協働する「八剣山周辺地域活性化プロジェクト」の立ち上げについて議論します。

主催：(社)北海道中小企業家同友会・Hope 農商工連携研究会

共催：八剣山発見隊、さとやま八剣山(10周年記念事業)

後援：(社)北海道環境保全技術協会、砥山農業クラブ、札幌市立大学デザイン学部

日時：平成22年4月3日(土) 午後1時30分～5時

場所：札幌市立大学サテライトキャンパス

〒060-0003 札幌市中央区北3条西4丁目 日本生命札幌ビル5階

電話 011-218-7500

参加者：八剣山周辺地域に関わる各団体、地元関係者、関連企業、関係行政、その他

参加費：無料

<シンポジウム内容> (全体司会：近藤 勝((有)北銘サポート)

・一般講演(1405～1605)

1. 「南区における地域連携の取組み」 ---- 吉村卓也氏(東海大学・教授)
2. 「八剣山周辺の地形地質と潜在ジオサイト」 --- 大森正一氏(さとやま八剣山・会長)
3. 「八剣山周辺の自然と昆虫」 --- 木野田君公氏(坑井データサービス)
4. 「八剣山の麓からの環境活動」 --- ビアンカ・ヒュルスト氏(ナチュラリスト)
5. 「八剣山発見隊から考えるボランティア活動」
---- 吉田恵介氏(札幌市立大学教授、八剣山発見隊隊長)
6. 「さとやま八剣山の10年」 ---- 亀和田俊一氏(さとやま八剣山・事務局長)

(休憩)

・集中討議(1620～1700)

「八剣山地域経済活性化の将来ビジョン」 --- 八剣山フルーツ産業創出事業推進計画

「八剣山周辺地域活性化プロジェクト」の発足について

・パネルディスカッション

以上

開会ご挨拶

瀬戸 修一（砥山ふれあい果樹園代表）



八剣山プロジェクトという形で、札幌市南区における新しい農業振興のあり方とか、姿とかを検討したいという話が始まったのは、昨年暮れのことでした。それから3ヵ月の間、いろいろな方々から、協力したいとか参加したいという申し出をいただき、本日の運びになりました。まずはその背景を皆さんに紹介させていただきます。

今回のプロジェクト発足の背景の一つは、地元の札幌の南区の農業従事者が大変高齢化していて担い手が不足し、活力がなくなっているということです。もう一つ、私どもは農産物が無駄なく有利に販売されて行くということが、農業経営を魅力あるものにする経営を長らえていく、そのためには組織の活性化を図ったり農業の振興していくルールそのものを変えて行かなくてはならないという強い危機感をもっています。私はこれまでそういった心情でやってきましたが、仲間からもこれに強力な共感をいただいた人々が出てきて今日を迎えたということです。他方、八剣山（周辺地域）には大変豊かな自然があり、農業を中心とした豊かな里山も存在しています。また、最近の動きとして都市と農村の交流とか自然との共生ということで、多くの市民の皆さんが、（この地域で）いろいろな活動をしているという状況もでてきています。地元の農業者とボランティアの皆さんが協力していろんな体験をされています。あるいは、この周辺地域で（札幌市の）バイオマスタウン構想が提唱されており、地元の生ごみを回収して堆肥化し、これを使った農産物を地元で販売消費してもらうような大きな事業計画とか、さらにシーニックバイウェイなど、いろんな動きがあります。

今回、フルーツ観光とか果実酒研究所とか、それに関連する果汁生産などの地域活性化のアイデアが出てきて、そういう取組みをただ単に異業種の交流ということで済ませるのではなく、皆さんのお力と協力や連携で取り組めば、いろいろな隠れた可能性が生まれてくるのではないかという思いがあります。それで、ちょっと強引ですが中小企業家同友会の研究会の形で、関係する皆さんの知恵とか力を借りて、地域づくりに取り組みたいと考えているところです。後ほど提案をしますが、4つのワーキンググループに分けて検討や調査や組織の研究をするという枠組みを考えています。大枠はこのようなことですが、実際には今日のシンポジウムがその第一歩です。今日は70人近い皆さんのご参加をいただいています、これからがスタートというつもりでいただきたいと思います。

絵に描いた餅という話があります。私たちの取組みは、まだ十分に絵を描き切れていない笑い話のような話かも知れませんが、これだけの皆さんが集まって下さったのは、今回の話にそれだけの期待があり、それからやはり大きな可能性を持っていることの表れだと、重く受け止め、進んで行かなければならないと思っています。

今回のシンポジウムをとおして、八剣山地域の豊かな可能性を皆さんに知っていただき、たくさんの方々がこのプロジェクトに参加されるきっかけとなれば幸いと願っています。

本日はたくさんの皆さんにお集まりいただき感謝しています。実りある会であることを願って主催者のご挨拶といたします。

以上



受付の皆さん



会場の様子

<一般講演 1 >

「南区における地域連携の取組み」 (要旨)

吉村 卓也・東海大学教授



皆さん、こんにちは。私は、「情報発信をする方法やいかに情報を出していくか」ということを専門にしております。今日のサブテーマを「地域を編集する」とさせていただきます。編集というのは、いろいろな材料を使って美味しいものをつくる料理のようなものですが、良いものはより良く見せ、普通のものも良く見せるということで、(地域の編集とは) 地域のイメージを高める作業です。

私は、埼玉県出身で札幌に住んで13年になります。ここが一番気に入っていて、多分ここを離れることはないだろうと思っています。首都圏に住んでいるものには、こういう素晴らしい環境は大変な贅沢です。空気の良さ、四季の変化の美しさ、食べ物の美味しさ、地域活動を通じていろいろな方々ともお付き合いもできる、大きな可能性を秘めた場所だと思っています。

私が本日持ってきた資料は、南沢蜂蜜と旧道茶屋のパンフレットです。この南沢蜂蜜とは、いうまでもなく札幌市南区南の沢産のもので、2007年に商品を創りました。これは分かる人には分かると思いますがミツバチの巣箱で、南の沢の森の中に毎年仕掛けられているものです。なんで商品を創りたいと思ったかという、私はいろいろ情報発信をしていて、さまざまところに行きますが、自分でやってみるのも悪くないな、情報発信体験になるのかなと思ったわけです。きっかけは、あるデパートで全国道の駅食品展が開かれていまして、そこに滝川の養蜂業者のいろんな種類の蜂蜜が出品されていて、面白そうなので味見していました。その中に非常においしいアカシアの蜂蜜があって、実は東海大学の裏の森で集めたものだというので、それを聞いてびっくりしました。それで私は東海大学の教員なんですという、向こうもびっくりしていました。大学の近くで蜂蜜を採取していますということを私は全く知らなかった。そのあと、いろんな人に聞いてみても、このことを人は知っている誰一人いませんでした。養蜂業者は全国各地を回って巣箱を置くのだそうで、その業者は南の沢で採取した蜂蜜を滝川に持って帰ってしまう。そこで商品化して生産量も限られているから札幌にはなかなか来ない。それは勿体ないと思ったのが始まりで、そこから学生たちといろいろ考えて、なんとかこれをブランド化して売らせてほしいという話になりました。一年後にこういう商品化が実現したのは、本当に素晴らしいと思います。業者の方は、夫婦二人で巣箱を仕掛けて、こうやって遠心分離機を回して蜂蜜を採取します。私が見たのはこれが初めてでしたけれど、もう十数年、南の沢で毎年やっているということを初めて知りました。このようなことが実はまだまだたくさんあるのではないかと、ということを蜂蜜が考えさせてくれました。それが一つのきっかけになった

わけですが、このようなことを直に見て、それが商品になったことを嬉しく思いました。滝川で扱っている製品の形とは全くちがって、こちらは箱に詰めてギフトとして使えるものになっています。アカシア蜜は透明感があり美味しい蜜です。これを札幌の蜂蜜ということで売っていますが、お客様で非常に良く売れて、毎年養蜂業者から無理をいって分けてもらっています。現在、北の沢にある社会福祉法人札幌この実会さんと連携して仕事としてシール貼り、瓶詰をしてもらっています。試作品の時は私たちが学校でやりましたが、量が増えたのでこのようにしています。



旧道茶屋ホームページより

なぜ私たちがこういうことを始めたかということ、あちこちに行くときに何か地元の土産ものが欲しいわけです。いつもマルセイバターとか白い恋人だけでなく何か地元のものがあって、これが私たちの地元で採れたものと自慢してやりたい、それが非常に喜ばれ人気があります。箱の絵はアカシアとこれに寄ってくるミツバチ、裏にあるのは藻岩山の森でそこに朝日が昇ってくるところです。蜂蜜の瓶に掛かっている紐ですが、札幌この実会は知的障害者の入所施設なので、その皆さんがマリーゴールドの黄色とタマネギの茶色で、草木染で染めたものを使っています。小さいロマンがこのパッケージに隠れているのです。毎年6月に一斉に白いアカシアの花が咲き、甘い香りが漂って今年も蜂蜜の季節がやってきたなど実感します。そして7月初めごろに1回目の収穫があります。その後に私どものラベンダー祭があり、そこで最初の蜂蜜を、私は勝手にそれをヌーボーと呼んでいます、その収穫を祝うというようなことを毎年しています。アカシアのイメージとか、札幌のイメージ、石川啄木の作品を使わせてもらっていて、札幌に良くあったキーワードを使って札幌を代表する商品ブレンドが創れればと願っています。

この実会さんはクッキーも作っていますが、これは旧道茶屋や地下街で扱っています。蜂蜜以外にも、いろいろ試作をやっています。今、ジャムを作ろうということでこの実会さんの畑にアロニアをたくさん植えています。苦いのでこれに蜂蜜やリンゴを加えたりブルーベリーを入れたり、試作段階ですがやがて商品化していきたいと思っています。一つやると、これにもう一つが派生してくるというふうに、いろいろ生まれてきます。これは実は瀬戸さんのジュースで、このラベルを貼って売っています。蜂蜜のアカシアの絵は南区のアーティストが描いてくれましたが、このリンゴの絵を描いてくれたのも同じ方で、すべて地元の力で商品化することができます。

これはラベンダー&ハニーソープで、札幌の Savon de Siesta という会社が商品化しました。札幌スタイルということで認証されています。札幌のラベンダーと蜂蜜を使っているということで、多少高くても売れています。こうして何かやっていると、それに反応してくれる方が出てきます。黙っては何も起こりません。私は発信しないということは無いのと同じと考えているので、良いことはどんどん発信したいと考えています。高い商品

ですが、ネット販売を中心に去年作ったものは完売しました。良いもの、そしてロマンのあるものは多少値段が高くても売れます。

それから旧道茶屋というコミュニティスペースを作っております。なぜ旧道茶屋というかという川沿の国道の旧道のところにあるからで、いろいろな商品を扱っています。日曜日はパンの日ということで、これも南区に住んでいるパンの先生がドイツ風の固いパンを作って今年も6月から販売します。これも嬉しいことですが、茶屋を作ったことで、不揃いの野菜を応援する会のグループの方から、茶屋でも

売らせて欲しいという申し出がありました。地元の野菜をここで売るということでやっていただいています。今年も6月末から土日に開き、野菜を売るだけでなくパンと一緒に食べられないかとも考えていますが、大変な人気で、地元で買う野菜がこんなに美味しいのか、という感想をいただいています。茶屋を作る時には、ゼミの学生が大工さんになって、ペンキを塗ったり机やテーブルを作ったりしました。ここでイベントをしたり、蜂蜜関係の講演をしたり本を並べたりといろいろなことをしております。これをやる時に信条を作りました。普通のカフェでなく、コミュニティカフェらしく地元の良いものを提供する、そして健康な食品に関心を払い、地産地消を目指してフードマイレージを少なくする。遠くのものを使わない。地域産業の発展に貢献し、地域の人達が幸せに暮らせる雰囲気作りを目指す。そして南区の情報を全国・全世界（夢は大きく）に発信する。旧道茶屋を、ここを訪れる人の手厚い心のシンボルにする。まだまだそこまでは至っていませんが、皆様方の力によって、ここに立ち寄ってさらに次の目的地に旅立つスペースになれば良いと思っています。南区は商店街が分散していますので、その振興は非常に大変な課題ですが、これから商店街とも連携してやって行くことを考えていきたいと思っております。地域の案内所になること、また観光はこれから大きな産業になると思っておりますので、札幌の南の地域にどのように観光産業を呼び込んでいけるかを、あわせて考えて行きたいと思っております。

以上



「旧道茶屋」とは？

[旧道茶屋公式サイトはこちら](#)

旧道茶屋とは、札幌市南区川沿の旧国道にあるコミュニティスペース&カフェです。月曜日から金曜日の10時から16時まで、コミュニティスペース(地域住民の集いの場)として開放しています。簡単な飲み物やフッキーを用意しており、簡単なカフェとしても同時に営業しております。休憩や会合など皆様に自由に使っていただけるようになっています。

しかし、ただのカフェではありません。店内のカウンター・テーブルはもちろんのこと、メニュー考案、営業まですべて「学生」の手で行ったのがこの旧道茶屋です。なぜこのようなカフェができたのか、ご紹介します。



SANホームページより

<一般講演 2 >

「八剣山周辺の地形地質と潜在ジオサイト」(要旨)

大森 正一・さとやま八剣山会長

まず八剣山周辺がどういう地域かを考えると、豊平川上流域にあって、南側の札幌岳、空沼岳、それからぐるっと回って中山峠、無意根山、余市岳、朝里岳、そして手稲山というように標高 1000m 以上の分水界が囲み、その真ん中に八剣山があります。

これは植生図です。昭和 56 年環境庁のデータですが、山の高さに応じて高い所にはエゾマツ、ダケカンバが分布し、八剣山周辺はエゾイタヤとかシナノキの広葉樹が分布しており、八剣山の回りは春の新緑と秋の紅葉など非常に綺麗な景観が見られます。

これは地質図ですが、いろいろな種類の岩石の分布と、それができた歴史を示しています。豊平川の流域は険しい地形が分布するところで、主に 500 万年前から 300 万年前の火山活動でできたところです。それから定山溪の上流に札幌で一番古い岩石があります。これは薄別川付近の 2 億年前のもので、地形の険しいところは海底火山の噴出物からなり、それらを基盤として無意根山などが作る分水嶺の回りには、300 万年ぐらい前の火山の溶岩や火山噴出物が分布しています。八剣山の麓には砂岩、泥岩などの堆積岩が分布しますが、これは 800 万年ぐらい前の海底に堆積したもので、それが豊平川の川底に沿って見られます。

この図は豊平川沿いの車でも行けるような、この地域周辺の地質の見所を示したものです。図の茶色っぽく示したところは火山活動による岩石、黄色く示したところは砂岩、泥岩とかの堆積岩の地層と化石が採れるようなポイントを表しています。茶色っぽく示したところには海底火山が噴火して水中で急に冷えたハイアロクラスタイトという岩石からなる断崖絶壁の景観が多く、これは積丹半島へ行くと同じようなものがあります。定山溪の辺りは石英斑岩、小金湯の辺りまで海底火山噴火によるハイアロクラスタイトが分布し、この下流は堆積岩からなりますが、ここから有名なサッポロカイギユウ、820 万年前のジュゴンの仲間の化石が発見されています。藤野の焼山や八剣山はこのような堆積岩を貫いた岩脈が作った山です。

今度は多少大胆に無意根山から豊平川を下って石山までを、東西方向の断面で見ることになります。一番西の無意根山は、この地域では新しい火山でカルデラをもっています。豊羽鉦山付近は、300 万年前にできた熱水鉦脈があり、鉛、亜鉛などを採掘していました。定山溪の地質は石英斑岩からなり、この辺りでは深くにある熱源の影響で温泉の温度が高いですが、下流の小金湯辺りでは少し温度が下がっています。八剣山や小金湯付近から下流にかけては、800 万年から 700 万年位前の海底だったところです。八剣山や藤野の焼山、石山の硬石山は、この堆積岩を貫いた溶岩が山を形成しました (1400 万年前頃)。そういう

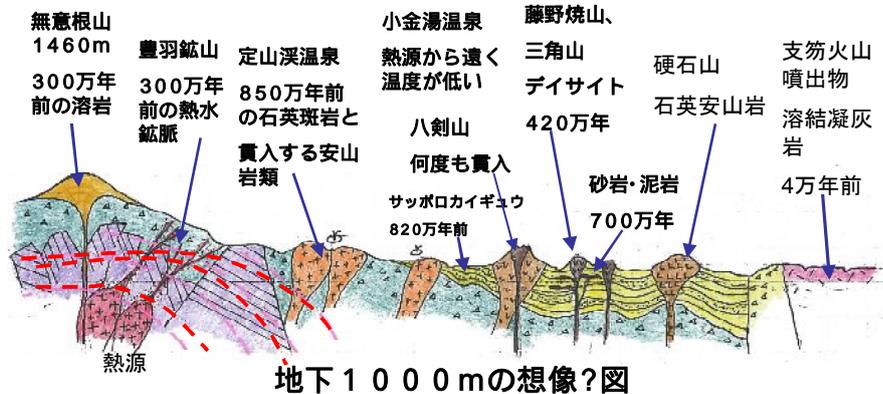


八剣山周辺のみどころ-地質断面図-

無意根山から石山にいたる東西の地下構造を簡略化してみました。

新旧の火山活動、泥や砂の堆積岩、貫入する石英斑岩、安山岩類が地質構造をひじょうに複雑にしている。

石山付近から東は、新しい時代の火山灰に覆われている。



大森氏講演資料より

ダイナミックな構造が豊平川上流域に見られます。

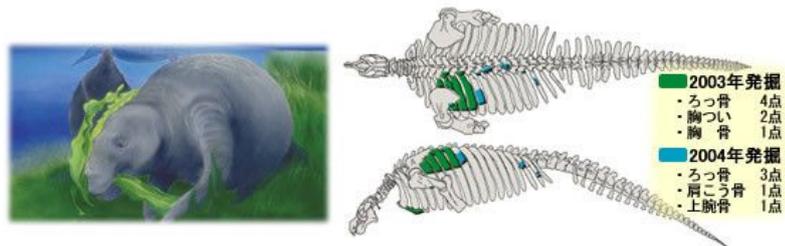
八剣山付近の豊平川を横断する方向の地形断面を見ると、河岸段丘が発達していることが判ります。段丘地形は10万年から1万年位前の間の地形変化を表しています。平らなところは豊平川の浸食が少なく安定していた時期に形成されました。段丘崖が形成されるのは地殻が隆起するか海水面が下がって浸食が激しくなったことによります。

小金湯付近から下流を見た写真は、藤野に大きな火山があったのではないかとと思われるような地形で、三角山とか焼山はその名残ではないかと思えます。それから石山には札幌軟石の石切り場があって、これは定山溪鉄道の石切山駅に使われたり小樽の倉庫群にも利用された石材ですが、現在は産出していません。これは、かつて支笏湖の方に大きな火山があって4万年前に大噴火を起こし、火砕流が熱雲として流れてきて厚く堆積し、内部が熱で再溶融・凝結して現在のように固結したものです。

これは硬石山の柱状節理です。これは砥山から下流の方をみた河床の堆積岩で、貝化石などが出てきます。河原に降りると上から見るのとは全く違って川の景観が素晴らしい。サッポロカイギュウは、八剣山のすぐ近くの豊平川河床で2003年に発見されました。定山溪温泉は、北海道の温泉を調べて見ると一番熱量が大きい自然湧出の温泉です。

豊羽鉱山は2006年に操業を中止した産業遺産です。日本最大の鉛・亜鉛の鉱山で、最近

では、インジウムという液晶に使う貴重な金属や金などの希少金属が地下600mの坑道で掘られていましたが、温度が高くなり過ぎてダイナマイトが使えな



サッポロカイギュウ

(札幌市博物館活動センターパンフより)

いので閉山になりましたが、まだまだ資源としてはあるようなので新しい採掘技術が生まれれば復活するかも知れません。

八剣山周辺地域の地質的な見所は、まだまだたくさんあって、ダムとか海底火山の跡とかを廻る日帰りツアーができればと思います。八剣山周辺は、私も高校時代に最初に地質巡検をしたところですよ。八剣山は当時から地域のシンボリックな存在であり、人と自然の良い環境を造る地域として大きな可能性を秘めていると思います。

以上



大森氏講演資料より

「八剣山の自然と昆虫」(要旨)

木野田 君公・坑井データサービス



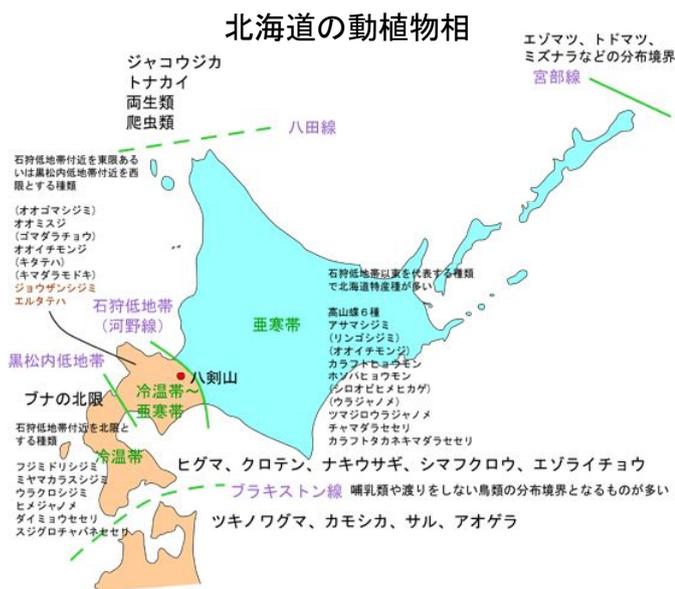
北海道とその周辺にはたくさんの生物相境界線があります。八田線、宮部線、ブラキストン線などですが、これらは海峡などで隔られている異なる生物相の境界を示しています。八田線は宗谷海峡に当たりますが、少し水深が浅くて氷河期には動物が歩いて渡れました。ブラキストン線は青函海峡ですが、深くて氷河期にも海峡であったためにマンモスなどは渡ることができず、こちらの方が生物相の境界としてはっきりしています。

八剣山周辺地域のすぐ東には石狩低地帯線(河野線)があり、結構大きい動植物相の境界になっています。南は黒松内低地帯がありブナの北限になっていて、いくつかの昆虫相の境界でもあります。本地域はこの石狩低地帯線と黒松内低地帯(ブナの北限)に挟まれた地域で、石狩低地帯を北限とする南方性の生物と黒松内低地帯を南限とする北方性の生物が生息していて生物相はとても豊富です。今回は、このような特徴をもつ八剣山周辺の昆虫を紹介します。

オオゴマシジミは(近年浦臼周辺でも産地が見つっていますが)主に石狩低地帯の南にあり、オオミスジは石狩低地帯を北限にしています。キタテハも、キマダラモドキもある程度石狩低地帯より南に生息しています。それからオオイチモンジ、これは主に道東を代表する種ですが、定山溪周辺にも分布しています。それからエルタテハは、本州にいて道南にはいない。でも黒松内低地帯より(定山溪辺りから)東側にいるという状況です。

この八剣山地域は北大の昆虫学教室のフィールドになっていて、実は近代昆虫学発祥の地は札幌だといわれています。初代の昆虫学教授は松村松年という偉大な先生で、1000種類ぐらいの新しい種類を発見したといわれているのですが、八剣山周辺で発見された新しい昆虫にはジョウザンという名前の付いたのがたくさんあります。例えばジョウザンシジミがそうです。このジョウザンという名称は、定山溪ではなく八剣山周辺のことではないかと思えます。定山溪に行くというのも八剣山周辺へ行く

ことだったのです。サッポロという名前がついた昆虫も多いのですが、それは円山とか藻



木野田氏講演資料より

岩山の辺りのことが多いようです。八剣山は北大のフィールドでしたけれども、それらを一纏めにして定山溪。そういう意味で八剣山は昆虫に関しては由緒ある地名です。

八剣山の地形の特徴ですが、まず石狩低地帯という地形地質的な境界があり、この南側には、昔でいえば那須火山帯が東北の方から繋がっています。石狩低地帯の東側の中心部は南の方から移動してきた陸地でここに衝突しました。根室方面の地質は千島列島の一部で、地質の違いによって植生も違うし昆虫も違います。それだけに石狩低地帯の存在は重要です。

分かりやすいので今日はチョウの話を中心にしますが、八剣山周辺で有名なのはジョウザンシジミです。幼虫の食草はガレ場に生えているキリンソウで、またガレ場はアリが多いのでアリと共生しているような側面があります。幼虫はお尻の蜜腺から蜜を出してアリに与えますが野外の生態は記録が少なく分らないことも多いようです。分布は極めて局所的で八剣山の岩場にもジョウザンシジミが生息しています。八剣山を取り巻く一帯から積丹、あるいは日高から帯広辺りにかけて生息していて、後は点々と小規模な産地がありますが一番有名なのは八剣山周辺か豊平峡なのです。

二番目に八剣山で有名なのがオオムラサキです。エゾエノキという木の葉を幼虫が食べ、成虫はその周辺を飛び回ります。成虫はミズナラなどの樹液を吸っています。北海道の生息区域は少なく、個体数も減少しつつあって生息域には八剣山も含まれます。私も学生時代に見た場所ですが、数年前のことですがマニアがエゾエノキの木の回り集まっていて、鮭釣りのような竿を一人で何本も立てていて、ほかにも何人もが長い竿を持っている異常な光景でした。話を聞くと採って売っているという人もいました。過度の採集は絶滅を招きますのでモラルとして止めてほしいと思います。これはオオムラサキの分布図なのですが、ほとんど道央付近にしかなく、八剣山から円山にかけては数カ所の生息域があります。エゾエノキは岩場の下に生える傾向があって、一般にはオオムラサキはその樹の周辺にしかいません。藻岩山でも軍艦岬の下の方にはたくさんいたのですが、樹の下に発電所の放水路ができて、冬の間幼虫が隠れる木の葉が放水路に落ちてしまうためにオオムラサキはあまり見られなくなったと聞いています。道南にもエゾエノキはありますが、オオムラサキはいないようです。

これは八剣山に生息するミドリシジミです。皆似ていて 4 種類とも幼虫はミズナラを食べていますが、それぞれ棲み分けをしています。オオミドリシジミは同じミズナラのヒコバエの腰ぐらいの低いところに卵を産みます。ジョウザンミドリシジミ、アイノミドリシジミは木の上の冬芽に卵を産みますが、ジョウザンミドリシジミは若干低いところの冬芽、アイノミドリシジミは若干高いところの冬芽、エゾミドリシジミは枝のまたのところに産みます。成虫はオオミドリシジミとジョウザンミドリシジミは朝早くから昼ごろまで活動

ジョウザンシジミ



幼虫は岩場に生えるキリンソウやベンケイソウ類を食べる。
幼虫はアリと仲がよくお尻の蜜腺から蜜を分泌してアリに与える。
分布は極めて局所的。八剣山の岩場に生息する。

木野田氏講演資料より

し、アイノミドリシジミは7時から11頃まで活動し、エゾミドリシジミは昼頃から夕方まで活動します。同じミズナラを食べていても棲み分けているのです。ジョウザンミドリシジミは、八剣山辺りで発見されたものだと思います。それからメスアカミドリシジミはサクラを食べる種類です。止まっているところはとてもきれいです。昔はいたのに今はなくなったのはツマキチョウです。八剣山周辺にもかつては生息していました。食草はコンロンソウでどこにでもあります、非常に環境に敏感で人通りや車の通行が多くなるといなくなっていく傾向があります。昔は円山動物園内にもいて、実は私は青森出身なのですが、修学旅行で円山動物園に来たときに学生帽で何匹か採ったことがあります、今は全くいません。札幌周辺にもいたのですが、いまはほとんど見られません。都会化すると真っ先にいなくなる蝶です。

オオイチモンジは道東がメインで、定山溪にもいます。本州では高山蝶とされていて、関東周辺のマニアが道東に採集に来ることで有名です。

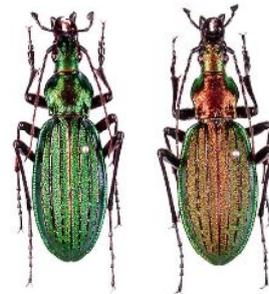
日本の国蝶といえばオオムラサキですが北海道の昆虫といえばこのオオルリオサムシです。日本昆虫学会で「北海道の虫」とされた北海道特産の種です。夜行性でカタツムリを食べますが、羽が退化して飛べないので結構地域ごとに変異があります。定山溪周辺で見られるのは赤っぽいのが多いですが、真駒内周辺より南の低地帯では黒いタイプも青いタイプもいます。

ヒメオオクワガタも最近定山溪で見つかります。それからエゾチツゼミ。セミらしい鳴き声でないで誰もセミだと気付かないのですが、岩場の近くの針葉樹にいて八剣山にもいます。ミミズクはヨコバイの仲間で、横から見るとミミズクのように見えます。八剣山でも夜間採集で採れます。八剣山にはいませんが、豊平峡とか百松沢にはシロオビヒメヒカゲがいます。この亜種は定山溪亜種とよばれ世界でもここにしかいません。日高方面にも別亜種がいるのですが、最近道路のり面のイネ科の植物を食べて定山溪方面にどんどん近付いて来ているらしいです。それが重なってしまうとこの亜種が消えてしまうかも知れません。

これはオオミスジで、定山溪付近が北限です。ミヤママルハナバチは百松沢や札幌湖付近が北限ですが、八剣山付近にもいるかもしれません。

こんな感じで八剣山周辺は貴重な自然が残されている由緒正しい場所です。今、地質の方では地質百選みたいなものを作っているらしいですが、この地域は、地質、植物、昆虫の特徴のある貴重な場所ですので当然選ばれるべき対象だと思います。このような自然資源を生かした地域起こしに、ぜひ役立てて欲しいと思います。

オオルリオサムシ



日本昆虫学会で「北海道の虫」とされた北海道特産種。夜行性で幼虫成虫ともカタツムリを食べる。飛ぶことができないため地域変異がみられる。八剣山周辺の山にも生息する。

木野田氏講演資料より

以上

<一般講演 4 >

「八剣山発見隊から考えるボランティア活動」(要旨)

吉田 恵介・札幌市立大学教授(八剣山発見隊長)



八剣山発見隊のこれまでのボランティア活動のご紹介と、今後どのようなことをやりたいかということ、私なりの意見を交えて述べてみたいと思います。八剣山発見隊は、2002年に、中小企業家同友会のご支援もありましたが、南区砥山地区の住人の皆さんと、この自然が良いなあ、ここに住んでいる人が良いなあということで、この山麓に魅せられた人々が集まって、この地区を何とかしよう、ということ、これを旗印に、地域の活性化と八剣山の環境保護、地域行事への参加などの活動を始めたものです。しかし、最近、ボランティアで好きなことをやりたいということで集まったということがありますので、会員相互の親睦とお互いに楽しむということを重ねて、親交を深めています。最近の地域の活動としてはサクランボ祭や剪定講習会、会員限定の親睦事業があります。サクランボとかイチゴの収穫が終わり後の枝葉をそのままにしておくと病気に掛かりやすいので、お手伝いの形で残ったのを選んで会員限定のイベントということで売りさばき、また実際に売り場とかで売ったりして活用する活動です。また地域行事への参加ということで、定山溪温泉のカップ祭で、定山溪温泉と八剣山の間でバスを運行していますが、このバスガイドをボランティアで務めたり、地元の収穫祭やお祭にも参加しています。これまで行ってきた行事はとて多く、会員は50人だと思いますが、30人ぐらいは参加しています。春の果物の花見から始まってタケノコ狩りやったり山菜採りに行ったり、そして冬の剪定講習会までが一年のスケジュールです。基本的には、自分たちのやりたいことをやって余り細かいことはいわない団体です。収穫のお手伝いもするし、広い空間を独占して最高の贅沢と皆喜んでいきます。また農と食ということで、食べることも中心になるのですが、素材だけではなく加工の方も重要でして、女性の方を中心に美味しいものをたくさん作り上げました。蕎麦打ち会とかイズシ造りも人気があります。2003年以來、たくさんの人が集まってきていますが、人が多いのはサクランボ祭と剪定講習会などといったところで、多少専門的でも人気を集めています。メインイベントはサクランボ祭で、競馬の代わりにアヒルレースをして、地元の方々からもらった景品を賞品にしています。ステージにはボランティアの方に立ってもらっています。サクラ



八剣山通信より

ンボ祭は 2008 年、2009 年の実績ではボランティア 50 人くらいが集まって、運営費用が 50 万円位の、とても安い経費でやっています。ほとんどが手弁当で、定山溪の観光協会の方にいわせると「そんなことではイベントにならない」と、ご心配をいただいているのですが、「素人でやるのだからその範囲でやる」というのがボランティアの考え方で、それなりの満足感を得ています。集客も 2008 年が一日に 4500 人程度で、駐車場の状況も含めて、この辺が適当かなと思っています。それから 2008 年のサクランボ祭の経営では、品物が売れないところが時にありましたので随分合理化しました。今は独立採算制ですが、広告費も貰った分だけであとはボランティアでやろう、会場の設営もしようという形にしています。それからメインイベントも担当の会員が好きな様にやろうということで、アヒルレースとか種飛ばしなども、それぞれ分担してやってもらっています。販売もしていますが、販売手数料は 10%取っているだけで、細かい条件は何もつけません。テントの設営もご自分でどうぞということで、我々もだいぶ高齢化社会に足を突っ込んでいるので余計なことは一切やりませんという態勢でやっています。参加者もまた来年も来たいという方がほとんどですが、来すぎても困るということもありますし、交通渋滞や駐車場のこととかゴミの問題で地元の皆さんにご迷惑を掛けるということもありますので、もう少しキチンとした形で運営管理をしなければいけないと考えています。

札幌市立大学の学生のほかに北海道大学、北海大学、北海商科大学の学生も何人か参加しています。学生の参加動機で、ボランティア活動についてどんな考え方をもっているのかということ、少しご紹介したいと思います。

私の研究室で、地域に学ぶということで、例えばラベルを作らましようということで、都会に住んでいる学生でお洒落なのでこの場所に合うかどうかということもありますが、生産者の思いをいろいろ伺って作ったものです。サクランボジャムのほかにハスカップジャムのラベルがあります。これなどシンプルで分かりやすく、お客さんたちに好評なので、今でも農家で使われています。それからホームページを立ち上げるということでモデルを作って農家に貸し出しているのですが、ホームページの運営は実際には難しいのであまりうまく行っていません。それからガイドマップ。八剣山のほか国道の方とか見るところはたくさんあり、地域密着型の地図にして観光パンフを作りました。地域のポスターは地域にとって大きなものと思いますが、こうしたものや、チラシなども作っています。

そういう中で分かってきたことがいくつかあります。一つは南区の農業の中で、耕作放棄地は大きな問題で非常に増えてきています。それが何に起因しているかといえば果樹とか種苗・苗木の作付け率などに平行していて、そういうところに原因があるということが分かったり、それから南区の住民意識を見ると、地元の方々が豊かな自然を育てようという意識が高い。そうすると保全と開発という二つの要因があるということです。具体的には保全を意識する方が全体の 67%、7 割近くいます。一方には地域に関心が薄い方ですが保全より開発というのが 33%位いる。それらを考えると地域は大きく三つのグループに分かれているということで、やはり地元の方に声を掛ける時は、その心の中はさまざま複雑だということが分かってきました。学生の地域参加に対する住民の方の反応を見ると、農産

加工品のラベル製作だとか、町おこしイベントへの参加などの直接的で簡便な活動には賛同してもらえるようですが、将来の生活がどうなるかなどの少し手間が掛かる問題点には抵抗があり、この辺りは当然違うチャンネルで補って行かなければと思います。他方、若者の雇用促進、社会経験的な視点からは学生に大いに参考になったと思います。

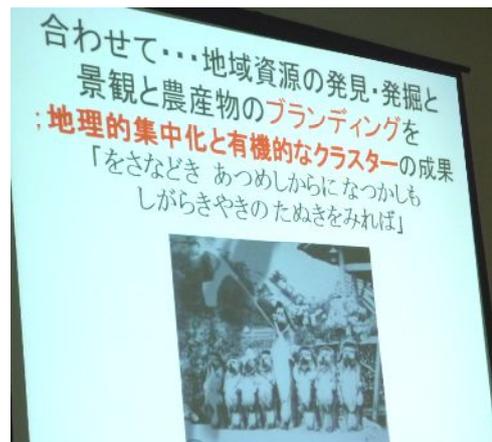
八剣山発見隊のこれからの課題ですが、環境資源、景観資源を生かした産業化による地域振興が大事だと思います。会員のネットワークとして、様々な組織が関わっていますし会員自体の相互の関わりがありますので、いくつか繋いでいけるものだと思います。

次に八剣山のイメージと、郊外の食とか暮らしとかのイメージについてお話ししたいと思います。図の右側が消費の側、左側が生産の側で、それが農村なのか町場なのかはいろいろパターンがあると思いますが、これをつなぐマーケットができるとコミュニティーができます。それらが子供たちや地域の人々に幸福を与えることで、経済や地域の将来に大きな影響を与えて行くものだと思います。そういった意味で、それをどうやって発展させていくか、地域振興の中で考えていかねばならないと思います。そういうことがきっかけになって郊外のなかで地域の持続可能性のある仕組みが生まれてくるのではないかと思います。

参考までに、アメリカのポートランドでは、都市の公共の遊休地、道路のような公共施設の建設予定地などを買い上げて畑が作れる公園にするコミュニティー・ガーデンという制度を作り、NPOに運営させるというような仕組みがありますが、そういうものを作っていくことも今後の知恵の出どころだと思います。アメリカでは、これを環境教育を含めた交流の場所にしています。またファーマーズ・マーケットというものがあります。これは消費者と生産者をどのような形で結ぶかということでNPOが始めたものですが、この20年くらいでポートランドの食料の数%が賄われるまでに大きくなっています。これによって一般のスーパーマーケットでもオーガニックや減農薬という意識が高まってきたり、マーケティングにシェフがボランティアで加わって、どうやって美味しい食材を提供するかということを考えています。いろいろな方から意見を伺うことによって、食の広い世界が見えてくるということが起こってきます。

八剣山の場所でしか食べられないものもありますし空気を含めてどうやってこれを作っていくかということが大事です。最後に一つの提言ですが、地域資源の発見と活用というテーマですが、その際に景観と農産物をどうやってブランディングするのか。良いものをどうやって残していくのかということもあるかと思いますが、その農業や商売を継続していくための仕掛けとしてブランディングという考え方があります。そのためには何をすべきか、これには(スキルの)恣意的な集中化が必要です。岐阜だったらある地域にたくさん職人さんが住んでいて、一本の傘を作るにしても紙を貼る人、竹を加工する人、皆が長屋に住んでいて小さなエリアの中で、いろいろ関係するものが集中しています。農業の場合でも小さなエリアに関係するものが一緒にいることが非常に大事だと思います。ですから一つの企業だけでなく、それが有機的な繋がり、オーガニック(有機)クラスターになって存在することが力になるのではないのでしょうか。

最後に、これは2、3日前にNHKで放映していた信楽の写真です。信楽はもともと人口が少ないところで、そこに昭和天皇が来ることになり、人が少ないので天皇が趣味で集めているという狸の焼き物を並べて歓迎しました。当初狸を焼いていたのは3社しかありませんでしたが、天皇はこれに感動して和歌を詠まれ、この歌が基になって“狸は信楽”というブランドができたのです。何がきっかけになるかわかりません。良いものを作るという地道な努力や、これを有機的に結びつけるクラスター化も必要ですが、何かの機会を待ってここはというときに花咲かせる“ため”も大事です。八剣山の地域がどのような形になっていくのか大いに期待されます。



以上

第96号

八剣山通信

2010年5月22日発行
八剣山発見隊

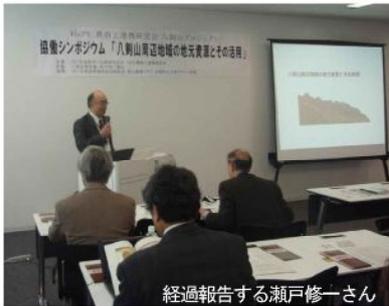
4月3日(土)

八剣山周辺地域活性化プロジェクト

「協働シンポジウム」開かれる

市民ら70人が参加

札幌市南区の「八剣山周辺地域活性化プロジェクト」の旗揚げを目指す協働シンポジウムが4月3日札幌市中央区の日本生命札幌ビル内の札幌市立大学サテライトキャンパスで、同地域に関心を持つ関係者、市民ら約70人が参加して開かれました。同シンポジウムは北海道中小企業同友会、HoPe農商工連携研究会の主催。



経過報告する瀬戸修一さん

同地域で活動している八剣山発見隊、さとやま八剣山が共催。(社)北海道環境保全技術協会、砥山農業クラブ、札幌市立大学デザイン学部の後援を受けました。

最初に、主催者を代表して瀬戸修一さんが、プロジェクトを立ち上げに至った背景や狙いを説明しました。次いでシンポジウムに移り、①「南区における地域連携の取り組み」(東海大学・吉村卓也教授)②「八剣山周辺の地



東海大学 吉村卓也教授



さとやま八剣山 大森正一会長

形地質と潜在ジオサイト」(大森正一会長)③「周辺の自然と昆虫」(木野田君公さん・坑井データサービス)④「八剣山の麓からの環境活動」(資料提供=ピアンカ・フェルストさん・八剣山地域の環境を考える会代表)⑤「八剣山発見隊から考える活動」(吉田恵介札幌市大教授・八剣山発見隊長)

⑥さとやま八剣山の10年」(亀和田俊一・さとやま八剣山事務局長)がパ



坑井データサービス 木野田君公さん

ワーポイントを使って、八剣山地域の豊かな自然環境や可能性、これまでの取り組みを説明しました。



札幌市大 吉田恵介教授
八剣山発見隊長



さとやま八剣山
亀和田俊一事務局長

カンテレ演奏も

休憩をはさみ、さとやま八剣山会員の永井裕美さんがフィンランドの民族楽器「カンテレ」を優雅に演奏し、もの静かな調べが参加者を魅了しました。



さとやま八剣山会員・永井裕美さん

この後、この日の核心となるプロジェクト「八剣山地域フルーツ産業創生事業(仮称)」について、砥山ふれあい果樹園主・瀬戸さんと、(株)レアクセス代表・亀和田俊一さんが事業の概要について共同提案しました。

「さとやま八剣山の 10 年」(要旨)

亀和田 俊一・さとやま八剣山事務局長

「さとやま八剣山」は、名称の前に“自然に親しむ市民ボランティアグループ”というタイトルをつけて活動しています。組織になっているかどうかは微妙なところですが、ご紹介いただいたように発足以来 10 年経ちました。10 年の節目にこのような記念行事の場を設けていただいたのは大変有難いことです。

最初に、さとやま八剣山の“里山”とは何かということですが、里山は、山林を人間が生活のために利用してきた過程で、自然の再生機能に人的関わりが加わって歴史的に成立した継続可能な環境システムです。その機能は 6 点ほどありまして、①既に一定の緑の量が確保されている。②その地域の特性に適応した生態系を保持して維持管理されている。③多種類の植生や土壌、野生生物が一体となった生態系が形成されている。④環境保全機能(CO₂の吸収など)を有している。⑤林産機能(木材・エネルギーのストック、食料生産基盤)を有している。⑥環境教育、癒し、リクリエーションの場である。小難しく表現していますが、里山はバイオ資源のストックであるとともに、一定の環境保全機能を有する生態環境システムです。さらに近年ではこれを都市生活者が利用することで、生活の質向上に資する効果があることに注目されています。里山が見直されているのです。

ところが北海道には里山がない、ということです。私は栃木県出身ですが、本州の感覚からいえば、北海道というのは山遊びができないところだという印象があります。それは開発の日の浅い。従って、薪炭利用をする期間がなかった。過去に伐採、植林が行われ、その後放置された結果、荒廃した山林に直接接して市街地が形成された。戦後、成長の速いカラマツが植林されその後間伐もされず放置されたため鉛筆のような樹勢となって密生して整備もままならない。笹藪が密生して立ち入りもできない。蔓性植物が繁茂し木が引っ張られて倒壊するなど荒廃が進みつつある。ということで実はこの八剣山フィールドも、当民間企業が 96 年から所有しているものですが、当時はまさに、民有山林が荒れ放題という状況でした。これは札幌市全体では今もあまり変わっていないのではないかと思います。そこで先程紹介したような里山の環境を作って利用したいな、という動機で皆さんと相談して作ったのが、この組織です。1997 年暮れと 99 年 3 月、有志の意見交換会を経て、里見八犬伝のもじりで『さとやま八剣山』という名称をつけ、99 年 5 月に設立総会を開いて発足したというのがこれまでの経過です。



その後、例えば道新の取材を受けて紹介記事を掲載してもらったり、札幌市主催の市民フォーラム『みんなで取り組む緑のまちづくり』や北海道主催の『森林と市民を結ぶ集い』など地域のイベントに参加して活動内容を紹介したりと、いろいろ活動を重ねてきました。

当会の会則には、目的として「本会は、里山ビオトープの構築、維持をとおして、遊び、研究、学習、人的交流の場を創出し、地域の生態環境、生活環境の融和を目指しながら、生命の息吹を感じ、心豊かな生活を支える活動を行うことを目的とする」とあります。このような崇高な理念が実現しているかどうかはさておき、以下に「さとやま八剣山」の活動についてご紹介します。

メインの活動時期は4月から11月の雪のない期間です。会員は名簿では50人超ぐらいで、年齢層は35歳から75歳くらい、若干超えた人もいますが、大体その位です。例会は月2回、第2、第4日曜日にやっています。いつもだいたい15人から20人ぐらいが集まっています。活動は共同あるいは勝手にやる農作業が中心です。例会時には野外料理、たいがいはバーベキューなどをして楽しんでいます。また、適当に散策、適当にキノコ取り、山菜取りをしています。それからソバの栽培。これはソバを自分で蒔いて、自分で育てて、自分で刈り取って、自分で挽いて、自分で打つ。“挽きたて”、“打ちたて”、“湯がきたて”で三たて、それに“採れたて”を加えて四たて蕎麦だと威張っています。冬のススキノの例会は大いに盛り上がります。たまにバザー、登山、研修など真面目な活動もしています。

運用は年会費3000円（通信費）で賄っています。そのほかに入会品が必要ですが、これはスコップとかクワとかフィールドで使う道具なら何でも良いです。活動のルールは基本的に緩いです。来たいときに来れば良いということです。

これは八剣山の頂上からフィールド見下ろしたところです。田圃は多分、札幌市の最西端にあったもので、今は耕作放棄されて4年ぐらいたって木が生えてきて非常に残念ですが、谷津田の見本みたいなものでした。ここに村のようなものがあり、これは縄文小屋、「あずまや」でして屋根、柱はあっても壁はないという集会所です。これは村人が働いて井戸をつくって水の確保をしようという公共事業です。農作業のようすですが、これは唐箕（とうみ）で、こんな古い農機具を使ってソバの実の選別をしているところです。こんなことをしながら一年を楽しんでいるわけです。

ホームページがありますので、この内容をご紹介します。

自然に親しむということで地形地質、植生の紹介があります。これは秋の八剣山ですが非常にきれいな紅葉が見られます。これはビオトープを作ったところで、今は草ぼうぼうになってきておりまして、自然の回復を目の当たりにしています。これは絶滅危惧種のニホンザリガニでフィールド内に生息しています。菜園ではジャガイモを作ったり、大豆を加工して豆腐を作ったりしています。野外料理の研究では、ホタテのバター焼き、マグロカマのそのまんま焼き、大鍋でのイモ煮会は里芋でやりますが特に人気があります。

『さと八』うた暦には、会員の折々の歌が掲載されています。ちょっとご紹介します。

鋤のあと宴の跡も雪の下

降り積もる雪ぞ春辺の芽生え呼ぶ-----八剣山の情景であります。

思い出のさと八を背に生きるかな

実はこの歌を作った会員の方は、現在体調を崩して療養中です。早い回復をお祈りいたします。

八剣山地域で10年間活動して来て変化したのは、この地域をとおして会員同士の心がかよってきたということでしょうか。今日のシンポジウムでは、八剣山発見隊、市民の皆さん、農家の方が一堂に会して、また少し繋がりや輪が広がったと思います。これからもこの場所でのフィールド活動をとおして、地域との繋がりや心の繋がりを深めて行きたいと思っております。

以上



さとやま八剣山ホームページより

<一般講演6>

「八剣山の麓からの環境活動」(ご本人欠席のためスライドのみ紹介)

ビアンカ・ヒュルスト氏 (ナチュラリスト)

ビアンカ・ヒュルストさんはドイツ出身のナチュラリストで、現在八剣山山麓に在住し、環境カウンセラーの資格でさまざまな環境活動を行っている。所用で当日のシンポジウムでの講演をいただくことはできなかったが、ご提供いただいたスライドを使って八剣山山麓での活動の様子を紹介した。



休憩時間に、さとやま八剣山会員・永井裕美さんによる
カンテレ演奏が行われた。

<集中討議1>

「八剣山地域経済活性化の将来ビジョン」

—八剣山フルーツ産業創出事業推進計画の協同提案—

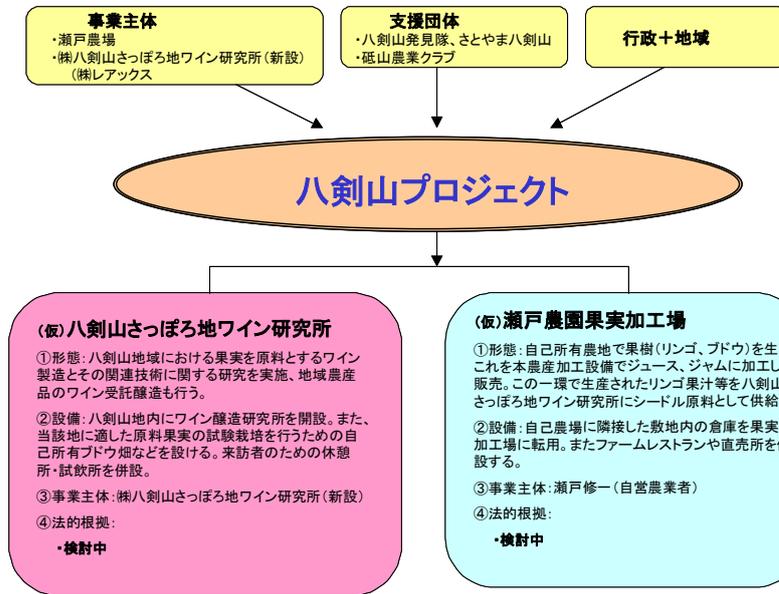
亀和田 俊一（発表）・瀬戸 修一

私は、先ほどご紹介のさと八フィールド内で、一昨年からワイン用ブドウを試験栽培してきました。これが去年の実績なのですが成育もまずまずで思ったより良くできました。もともとこの地域は果樹栽培の適地で南に開けた有利な地形なので、例えばワイナリー立地の適地であると考えられます。そこでこの地域に、果実加工技術研究所（果実酒醸造所）の立地ができないかと構想しています。構想と申し上げるのは、醸造所というのは許認可事業で結構条件が難しく、国税当局の許認可が要るし建物を作るにも都市計画法の下で多くの制約があって、それをどうやって乗り越えて行くか、あるいは地域研究所としての位置付けをどう組み立てるのか、いろいろ考えるべき検討項目が多いからです。研究所とする理由は、例えば八剣山地域の果実を原料とするワイン醸造の研究、地域農産品の受託加工の研究を目的とするもので、例えば瀬戸さんのところ（左側の水色）のリンゴを果汁にしたり、さらにこれをワイン（シードル）原料とするような研究ができれば、お互いに連携する役割も果たせ、その成果も地域還元できるということです。先程から八剣山地域の活性化ということで話が進んできていますが、地域内での果実原料生産～地域内での加工製品化ということであれば自然な連携ができますし、八剣山の共通ブランド確立の方向性も明確になります。細かい話は別として、この構想にはいろいろメリットがあります。成果として地元原料を使った新規の農産加工品ができるほかに、これにともなう原料生産拡大、エコ環境の向上などいろいろな展開が考えられます。なにしろ（果樹生産の適地として）場所が良いということがあります。景観として既に八剣山自体がありますが、これにブドウ園が追加されることにより地域全体の景観価値が上がるのではないかと考えます。周辺農家の休耕農地についても、市民による農業参加の機会拡大ということを含めて、果樹栽培農業復活につなげられるのではないのでしょうか。先程も木野田さんから話があったのですが、景観、環境、果樹園が一体となったジオサイトが構成できれば生態系の維持にも貢献します。

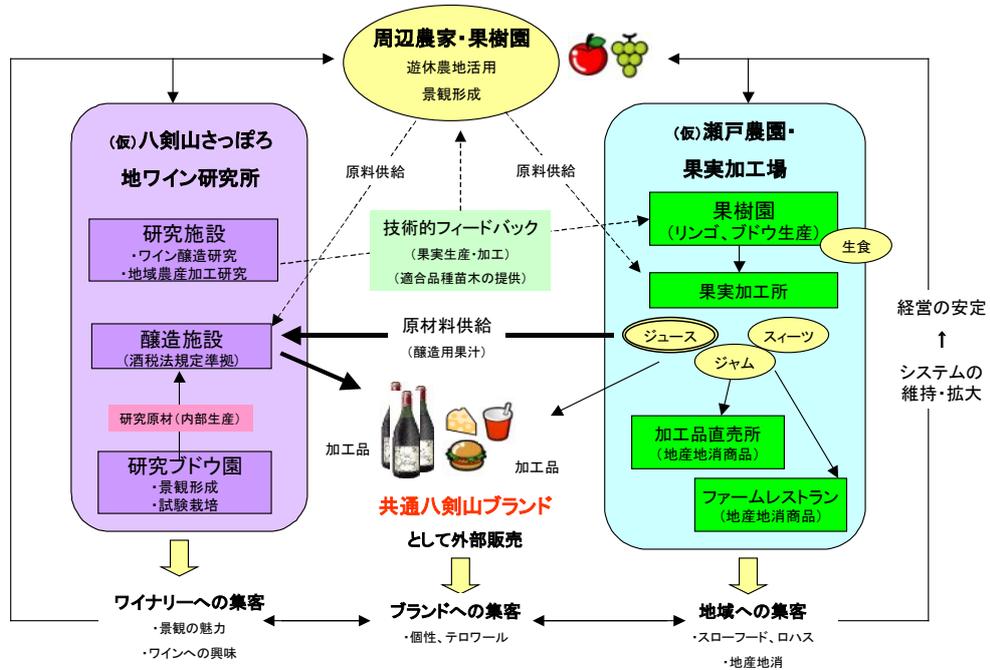
本日のシンポジウムでの講演内容や、ここにいたる経緯・状況を踏まえ、私たちは、ここに、八剣山周辺地域活性化プロジェクトの一環として、八剣山地域活性化に資する果実生産とその加工技術研究とその事業化を目的とする「八剣山フルーツ産業創出事業推進計画」を提案いたします。（詳細別紙資料）

以上

八剣山地域フルーツ産業創生計画①...体系



八剣山地域フルーツ産業創生計画②...事業



<集中討議 2 >

「八剣山周辺地域活性化プロジェクト」の発足について

瀬戸修一（発表）

1. 趣旨

当研究会では農産物などの加工を中心に種々の取組みが進められているが、地域の農業を起点として直売所や観光ファーム事業など、いわゆる 6 次産業化を進めようという動きも起きてきている。

この中で、札幌広域圏にあって札幌市南区砥山・八剣山地域は、景観に優れた魅力ある地域として認められ、かねてより観光農園事業などが進められており、「八剣山発見隊」や「さとやま八剣山」など地域の活性化をめざすサポーター層も形成されてきている。一方、地域農業の主体となる農業経営者は高齢化が進んできており、担い手問題も重要な課題となってきた現状にある。

この機会に当地域の関係者が集まる中、あらためて地域活性化を進めようとする本プロジェクトを立ち上げて、都市近郊にあって景観と地域資源、人材を生かした農業関連事業の立ち上げを種々検討し、総合的な事業化へ向けた取組みを進めていきたいと考える。

2. ワーキンググループ（WG）の構成とテーマ

プロジェクトの構成は、「加工部門」として軽食喫茶からファームレストランの経営をめざす砥山ふれあい果樹園（瀬戸代表）が中心の農産加工WGと、地元のりんごやぶどうの果汁からシードル、ワインの生産をめざす（株）レアックスが中心の果汁加工WGを置く。

また、「地域づくり部門」として主に景観の改善や体験農業事業などを進める景観整備WGと、周辺地域や地元住民および関連諸団体との連携を進める地域連携WGを当地域に関わりのある大学の研究室などとともに進めることとする。

部門	ワーキンググループ	テーマ	主な関係者・対象先
加工部門	農産加工WG	1) 地元果樹、野菜を活用した加工レシピづくり 2) 地元直売所販売用の加工品開発 3) 軽食喫茶、スイーツカフェ、ファームレストランなどの検討	1) 八剣山発見隊（砥山加工研究会） 2) 同上、瀬戸代表（砥山ふれあい果樹園） 3) 瀬戸代表、シロクマ北海食品（荒川社長）、パールモンドール（下出社長）
	果汁加工WG	1) りんご果汁のジュース、シードル加工 2) リンゴワイン、ブドウワイン試作 3) ワイナリー施設の設置検討	1) レアックス、瀬戸代表 他 2) 3) レアックス

地域づくり部門	景観整備WG	1) 案内板、サインの整備 2) 直売所、販売所の設置と整備 3) 市民農園、農業小学校の位置づけと活かし方 4) 登山道、散歩道、フットパス、ビオトープなどの検討	1) 発見隊、札幌市立大学吉田研究室 2) 同上 3) 農業小学校、レアックス 4) さとやま八剣山、発見隊、吉田研究室
	地域連携WG	1) 広域的な地域農家との連携 2) 定山溪観光協会、小金湯温泉との連携 3) バイオマスタウン事業への協力 4) シーニックバイウェイ事業への協力 5) 地元農家、住民の要望調査と協力	1) 東海大学吉村研究室、札幌市 2) 事務局 3) 札幌市、中小企業支援センター 4) 開発局 5) 吉村研究室、札幌市
事務局		1) ワーキンググループのとの情報共有、プロジェクトの全体運営 2) 行政機関との折衝、法制面の調査 3) 補助事業、諸団体連携 4) 地域農家、住民への働きかけ周知	・瀬戸代表 ・トライアド 三原社長 ・同友会事務局伊勢局員 ・北銘サポート 近藤

3. 主な経緯

- 2009年12月： 準備文書作成。プロジェクトメンバー候補者への呼びかけ。準備会の立ち上げ。
- 2010年1月： 「八剣山プロジェクト」準備会議初回会合、参加メンバー顔合わせ。検討課題とワーキンググループ（WG）の原案発表。
- 同2月： 第2回準備会議会合。札幌市立大学吉田教授「八剣山発見隊の活動」発表。石狩農業改良普及センター中村主査「砥山加工研究会の農産加工レシピーづくり」発表。
- 同4月： 協働シンポジウム「八剣山周辺地域の地元資源とその活用」開催。本プロジェクトの正式立ち上げ。
- 同4月以降： 各WGごとに具体化計画を作成し、実行可能なWGから実施検討と着手へと向かう。2カ月に一度ペースで検討会議開催予定。

4. プロジェクトの主要メンバーの所属先と相談機関

○砥山ふれあい果樹園（瀬戸代表） ○（株）レアックス（亀和田社長） ○八剣山発見隊メンバー有志 ○さとやま八剣山メンバー有志 ○H○PE農商工連携研究会および北海道中小企業家同友会札幌支部農業経営部会有志 ○東海大学吉村研究室 ○札幌市立大学吉田研究室 ※相談機関として、札幌市関係部局、北海道立食品加工研究センター、札幌市中小企業支援センターなどを予定。

以上

<パネルディスカッション>

座長： 吉村卓也氏（東海大学・教授）

パネラー： 瀬戸修一氏（砥山ふれあい果樹園代表）
大森正一氏（さとやま八剣山会長）
木野田君公氏（坑井データサービス）
吉田恵介氏（札幌市立大学教授、八剣山発見隊隊長）
亀和田俊一氏（さとやま八剣山事務局長）

（吉村） 構想（八剣山フルーツ産業創出事業推進計画）を聞きました。壁も厚そうですね。スタートはいつ頃と考えていますか。

（亀和田） ハードルは高いです。とくに市街化調整区域の規制と酒税法の許認可は…。可能であれば来年には実現したいと思っております。しかしかなり厳しいのも事実です。

（瀬戸） 今年の作業・収穫は6～7月に始まり、この期間はかなり忙しいです。まず簡単にできるもので、果汁、アイスクリーム、シャーベット、それとパン・菓子の生地を事前に半加工しておくような形であれば、今年夏にはスタートできるかなと思っております。ただ水道、電気、その他の設備に7、8百万円掛かる見込みなので、できるところから手掛けて3～4年でできれば良いと思います。

（吉村） 私たちは、どんなサポートをしていけば良いでしょうか。大森さん…

（大森） ポテンシャルのある地域です。私の専門からいえば地質などの観察ポイントを決め日帰りツアーを組めると良いと思います。資金と法的制約をどうクリアするか知恵を出してほしい。

（吉村） 発見隊としては、どうでしょうか。

（吉田） これからですが、いろいろなメンバーがいるのでサポート組織としては適任だと思います。サクランボ祭の実績もあります。何より地元産品の安定的供給の仕組みができるとありがたいです。

（吉村） 農業というキーワードでいうと、札幌近郊ではファームレストランなどの人気があります。私などもっと近いところであればと思うのですが、亀和田さんがいうように、それが市街化調整区域だとできないということになってしまう。札幌市だとこれが大きな制限要因になっていると考えてもいいのでしょうか。

（亀和田） 市街化調整区域指定によって、環境保全すべき地域とそうでない地域を峻別する必要性は基本的には理解できます。もともと宅地化の無秩序な増殖を制限する方向の中でできてきた仕組みですが、現在は何が何でも規制するということになってしまっているのは否めないと思います。環境保全活動をしていても建築規制で休憩できる場所が持たないので、寒い思いをしてきたというのは事実です。

（吉村） 札幌の人口はある程度で増え止ってもう減少に転じるという傾向だと思っておりますが、200万都市の手前で足踏みしているなかで市街化調整区域の線引きというのがこれから

どれほど有効なのかということがキーポイントになると思います。都市周辺の開発という点、そして農村との共存という点で、どんなものなのでしょうか？

(吉田) 1972年にオリンピックがあって、それから札幌は大きく拡大していわゆるスプロール化が始まったわけです。今は逆スプロールになって、都市が縮小してきているということが札幌の大きなテーマになってきています。これが良い意味で、街づくりの見直しの課題でありチャンスにもなるのではないかと思います。郊外はもともと都会の人にとっては憧れの的で、近隣の農家との交流や自分で作ったもので差別しながらグリーンライフを楽しむ良い時代が来たと思います。

(吉村) 私も数年前に家探しをしましたが、一般人が市街化調整区域に家を建てるのはものすごく難しいし、物件もほとんどないという状況です。そのようなライフスタイルを望んでも、システムとして用意されていないということがショックでした。一方、若い人で最近では定山溪に住もうという人も出て来ました。不便を厭わない人もいます。今後八剣山地域というのも見直されるような転換点に差し掛かって来たのではないのでしょうか。

(大森) ヨーロッパでは、田舎に住んで環境を大事にするエコ・ヴィレッジという考えが進んでいます。日本でも本州では里山や棚田が見直されて来ました。その点、豊平川の上流域は豊かな自然、果樹園、上流には温泉などがあり国立公園でもあって恵まれている地域です。地形に対応した植生・生態も豊かです。八剣山地域はその中心にあるわけですが、そんなところをもっと宣伝していかなければならないと思います。

(吉村) デンマークのクリスチャニアというエコ・ヴィレッジは、最初はヒッピーのような不法占拠者が住み始めたところですが、今はアーティストのような若い人が住み始めて発展し大観光地になっています。エコということで自転車が移動手段になっていて、そこで作っている三輪車とか自転車がブランド品になって流通し、産業化しています。八剣山にも同じような潜在力があるのではないのでしょうか？そういう風に先行していかないと、なかなか法律は変わらないのではないかと思います。

(亀和田) 基本的には都市計画法でしぼられているということですが、札幌市の開発審査基準の考え方で可能性があるものはいくつかあります。一つは農業交流施設、もう一つは研究所、もう一つが中小企業基盤整備事業による認定ということなのですが、実は地域に最も適するような品種の栽培、あるいは加工の研究拠点をつくるというのが一つの出口になるのかなと思っております。

(吉村) 法律というのは使えるところは利用して行くということだと思いますが、そのうえで八剣山地域には何か突破力が欲しいですね。

(吉田) 逆スプロールも、ばらばらに戻っていくのではなく、拠点を作りながら戻って行くということだと思います。札幌も昔は苗穂村とか琴似村とか拠点から広がっていったわけですが、今度は戻っていくときの拠点の一つとしてうまく八剣山地域が位置付けされれば良いのではないのでしょうか？住まいの話がありましたが、京都の中心市街地に人がどんどん少なくなって来たときに、町屋クラブという古い民家を活用するNPOができて他所から来た人に紹介し始めたという事例があります。ポートランドのコミュニティー・ガー

デンでもNPOが市長に働き掛けて遊休地の使い道を拓いてきた。そういう第三者的な組織が誘導していくコアになれないかなあと考えています。そういう人が重なってオーガニック・クラスターが形成されることになればと思います。

(会場) 壁がたくさんあるので、これを何とかするコアを作っていこうということだと理解しますが、では突破口をどうするのか？例えば行政に具体的に働き掛けて行く、というところまで行ってないのではないのでしょうか。方向性はわかりますが時間も掛けてられない。スピードアップしていく体制を作ることが必要です。

(吉村) 行政の方もおられるが、ここではマイクを向けるのも立場上どうか…(笑)。実際、規制のない例えば長沼、栗山に大挙して札幌市民がいつている。他方、地元こんな良いものがあるのに私たちは成すすべもない、ことになってしまっています。ぜひこの計画をサポートしていかねばならないという思いです。

(瀬戸) 都市型農業に対する行政の縛りが非常に厳しいという環境が続いてきました。今、少しは緩和されて加工施設や直売所などは認められようになりました。しかし農家の人々は、(気持ちが萎縮して)新しい取組みや地域振興の話は自己規制して聞きたがらないような状況になっています。市街化調整区域の規制は農業を守るためだということですが、今は逆に農業者の首を絞めています。農業の高齢化は危機的な状況です。早く手を打たないと都市農業は存続できなくなります。本当に地域農業を振興させる気持ちがあるなら、もっと規制緩和のスピードを上げて欲しい。また市民の皆さんのご協力をお願いしたいと思います。

(亀和田) 今日は講演のなかで、八剣山地域がもっている地質の財産、環境の財産の紹介がありました。この利用の形としてジオツアーがあります。外から人に来てもらい地元に外貨を落としてもらおう仕組みです。ユネスコのジオパーク委員会で理論付けがなされています。お金も掛かりませんし、“熱い心”と“語り部”がいれば実現します。ぜひこのプロジェクトの目標に加えて欲しいと思います。

(吉村) 地域に来ていただいてお金を落とさせていただく、そして産業を起こして地域雇用を創出させれば地域農業に対する魅力も高まっていくはずですが、札幌市内ですることにはいろいろ障壁が多いのですが、誰かがこれを突破しなければならない。今回のプロジェクトを機に突破口を開きたいと思います。本日は大変ありがとうございました。

以上

(注意) 録音データからの文書化を行いました。音声聞き取れない部分があり、「意識」して言葉を補っている箇所が何箇所あります。また、編集の都合で割愛した部分があります。ご了解をたまわりますよう、お願いいたします。

文書化担当：貝塚忠弘(さとやま八剣山)

八剣山の魅力発信を

企業も協力プロジェクト発足

札幌・南区

札幌市南区にある八剣山の周辺農家と市内の企業、地域支援グループらが協力して地域おこしに取り組む「八剣山周辺地域活性化プロジェクト」の発会式（道中小企業家同友会・Hope農商工連携研究会主催）が3日、市内で開かれる。

標高498mの八剣山は気軽に登れる山として人気があり、ふもととの砥山地区には果樹園が広がることから、これまで各支援グループが周辺の散策や昆虫、植物の観察会などを開いてきた。今回は、それらグル



「できることから少しずつ取り組んでいきたい」と話す瀬戸さん

ープと地元農家、企業、研究者らが一致団結。賛同者約60人が出席する予定で、同地区の潜在能力を再確認し、農業やアウトドアで新しい産業の創出を目指す。

発会後は、各部門ごとにワーキンググループを設け、果物を使って、地元を活性化したい」と期待を寄せる。（山崎真理子）

北海道新聞

ワイン醸造で地域おこしを 札幌・八剣山活性化プロジェクト



ワイナリー計画などが話し合われた発会式

札幌市南区にある八剣山の周辺農家と市内の企業、地域支援グループらが協力して地域おこしに取り組む「八剣山周辺地域活性化プロジェクト」が3日、発会式を開き、地元産ブドウを使ったワイナ

リーによる地域ブランド創出を目指すことを決めた。道中小企業家同友会・Hope農商工連携研究会の主催で開かれた発会式には約70人の賛同者が出席した。同研究会は「資金や法規制など乗り越えなければならぬ壁は多いが、早ければ来秋に収穫した果物で醸造したい」としている。